笹島建設(株) 会長

笹島 信義さんに伺いました

SASAJIMA Nobuyoshi

映画『黒部の太陽』のモデルになった大町2号トンネル工事。そこでの挑戦の日々や、土木についての意見をお聞きした。

2008年10月15日(水)
笹島建設(株)

今でも印象に残る大破砕帯への挑戦

――笹島様は黒部川第四発電所(黒部ダム)の大町2号トンネル工事に、熊谷組笹島班の責任者として携わられ、映画『黒部の太陽』の主人公である石原裕次郎のモデルでもあったことは有名です。世紀の難工事として知られるこの工事で一番苦労されたことはなんですか。

笹島――私が熊谷組にお世話になり、この仕事を始めて今年で62年目になりますが、やはり一番の難工事で強く印象に残っているのが、この黒四の工事です。なかでも苦労したのは、大破砕帯の水と寒さです。夏でも4℃の冷たい水を浴びながら、毎秒600ℓもの勢いで降ってくるなかでの作業です。すぐに手がかじかんで仕事になりません。

通常トンネル工事は2交代で行いますが、昼夜3交代。しかも、1時間3交代し、手や体を温めてからでなければ作業ができません。ですから、作業員の数も通常の6~7倍は必要でした。あれだけの難工事になると、使う人、使われる人といった思いもなくなり、一体となります。偉い人だろうか、作業員だろうが、休憩所に戻り、電熱器で体を温めるときは平等。そういう連帯感があったからこそ、成し遂げられたのだと思います。

戦後アメリカの大型機械を見て腰を抜かした

――昔のトンネル工事と最近のトンネル工事とでは、施工する立場として何か違いはございますか。

笹島――やはりなんといっても機械の質が違います。機械が良くなってきました。特に、戦後、日本の土木工事ではアメリカ製の大型土木機械がどんどん投入されるようになり、施工方式が一変しました。それまでモッコでしょっていたものが、ブルドーザーであっという間に運べるようになった。4tのダンプにスコップで土を入れるには4人の作業員で1時間はかかります。今ならシャベルで2回、1分間でできます。1953(昭和28)年に佐久間発電所工事を請け負って、そこでアメリカの大型機械を見たときには皆、腰を抜かしました。こんなものをもっている国と戦争をして勝てるはずはないとつくづく思いました。

また、今は施工技術が発達し、昔のような危険なことをやらなくても、工事ができるようになりました。今なら、黒四のような掘削の仕方はやらないでしょう。今、あのような破砕帯に遭遇したら、いったん工事を中止して、完璧にコンクリートで固めて、完全に水が止

聞き手
溝渕 利明
編集委員
[writer] 駒崎 文男
[photo] 崔 健三

まったか試験をして確認し、50m掘削して、また固めるという青函トンネル方式にしたでしょう。しかし、当時は勘で掘っていくしかありませんでした。

それから作業員の資質も違っています。昔は職人気質で、人のできないことをやってやるという強い思いをもっていました。私を含めて、生死をかけた戦いを経験してきた戦争経験者も多くいました。ですから、黒四では最初は「一生懸命やれ」と檄を飛ばしていたのですが、だんだん怖くなって、最後は「注意してやれ」と、私のほうがむしろ止める役になったこともありました。今はもう労働条件的にも、あんなことはできません。

笹島 信義（ささじま・のぶよし）さん プロフィール

1917（大正6）年富山県生まれ。現在、笹島建設会長として日曜祝日以外は毎日午前中に出社。1945（昭和20）年に熊谷組笹島班を組織し、世紀の大事業として語り継がれる黒部ダムのトンネル工事を担当。映画『黒部の太陽』で笹島氏の役を石原裕次郎が演じた。

文化や国の発達は土木から始まる

――今年は黒四の工事から50周年、映画『黒部の太陽』公開40周年ということで、今また脚光を集め、10月には大阪で舞台公演が行われ、来春にはTVドラマの放映も予定されています。土木のイメージアップにもなるとの声もありますが、どう考えていらっしゃいますか。

笹島――土木は、文化の発達と国の発達の源だと思っています。橋でも道路でも、最初に命がけで取り組んだのは土木であり、末端の作業員の人たちです。そのうえに、今の確立された近代的な文化が成り立っているのです。人のできないこと、人の開拓していない場所など、最初に入っていくのが土木です。何ヶ月も山奥に単身で乗り込んでいく。しかし、今の若い人はそれを嫌がります。地球の開拓者ではないですが、文化というものは土木から始まっているのです。建物の建築でも、その基礎は土木です。土木というものをもう一度考え直して、文化の基礎であり、すべては土木から始まると考えてもらえたら、少しはイメージも良くなるのではないでしょうか。

――土木業界へメッセージをお願いします。

笹島――まず、好きであるということが大切です。好きになれば、なんでも考え、研究もし、仕事の段取り一つにしても、自分で考えます。ですが、最近では、言われたことだけをやるという傾向があると思います。

私は満91歳になりましたが、今でも仕事が好きで毎日会社に出てきています。なんといっても好きなのです。だから、給料をもらわなくても会社に来る、好きだから来ているのです。会社に来ると、まず現場の進行状態がどうなっているのかをチェックしています。それが楽しみで来ているからです。

土木は一人ではできません。能力のある人たちを集め、多くの力を一つにすることで、何十倍も仕事ができる。それが面白味でもあります。若い人たちにも仕事を好きになってもらいたい。それだけはぜひ言っておきたいですね。